

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

サウディ・アラビア, ワーディ・ファーティマ地域 における衣服の変化とリバイバル

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2021-11-19 キーワード: 作成者: 郡司, みさお, 藤本, 悠子, 渡邊, 三津子, 遠藤, 仁, アナス・ムハンマド, メレー, 縄田, 浩志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009862

サウディ・アラビア，ワーディ・ファーティマ地域に おける衣服の変化とリバイバル

郡司みさお¹⁾・藤本悠子¹⁾・渡邊三津子¹⁾²⁾・遠藤 仁³⁾⁴⁾／
アナス・ムハンマド・メレー¹⁾⁵⁾／縄田浩志¹⁾⁴⁾

1) 片倉もとこ記念沙漠文化財団，2) 奈良女子大学，3) 人間文化研究機構，
4) 秋田大学，5) ムスリム世界連盟日本支部

1 片倉もとこによるサウディ・アラビアの衣服コレクションと その研究

片倉もとこによるサウディ・アラビア西部のワーディ・ファーティマ地域におけるフィールド調査は，人文地理学・文化人類学的観点から実施され，衣服については専門的かつ網羅的なレベルでの調査分析はなされなかった。しかし，地域に密着し，人々と共に生活するなかで，衣服の名称，機能やバリエーションの記録は記述，スケッチ，写真の形で残されている (Katakura 1977, 1996; 片倉 1979)。片倉もとこは，衣服の特徴として，まずは直射日光や砂嵐から身を守る，という気候的要因をあげ，続けて性的誘惑からお互いを守ることを指摘し，その根拠としてクルアーン24章30節，31節に言及している (片倉 1979: 65-66)。そのうえで，男性と女性の衣服の違いとして，男性はかつて衣服も髪型も部族ごとの個性があり，形状や色等が様々であったのが，画一的なものに徐々に取って代わられたとしている。それに比べて女性は，所属する集団，地域ごとに違いがあるとして，中東社会において血縁的要素のみでなく，地縁的要素も着目する必要を主張し，その表れとして衣服を考察した (Katakura 1977; 片倉 1979)。

片倉もとこが本格的にワーディ・ファーティマ地域において現地調査を開始した1968年には，国際的に活躍するサウディ・アラビアのジッダ (ジェッダ, Jiddah) 出身である画家サフィーヤ・ビンザグル (Safeya Binzagr, Şafīya Bin Zaqr) 氏が女子学校の教室を会場として初めて展示を開催した年でもあった。サウディ・アラビアにおいて1950年代後半から美術が学校の科目に加わり (Binzagr 1999: 35)，1960年代に入り国内の芸術運動が開花していったなかで，サフィーヤ・ビンザグルはエジプト，ロンドンにおいて絵画を学び，サウディ・アラビアの文化遺産を絵画として残す活動を志した (Binzagr 1979; 1999)。絵画の主題を決めるにあたり，古い写真をもとにスケッチし，参考文献，家族やとくにジッダを中心とした町・都市の年配の人々からの聞き取りをもとに，結婚，伝統衣服，建築，宗教，日常生活等を忠実に描くことを徹底した。そのいわば人類学的とも呼べる関心と手法をもとにした絵画にキャプションを加え，ワーディ・ファーティマ地域も含まれる紅海沿岸のヒジャーズ地方 (al-Hiāz) において，ベドウィン女性たち

が着用する顔覆いの形と装飾のパターンが部族ごとに異なることを提示した (Binzagr 1979: 56-59)。一方、彼女の代表作の一つである“al-Zabun” (Binzagr 1979: 49) は、ヒジャーズ地方の女性が着用する伝統的なドレスとして紹介されているが、片倉もこの調査資料には同じ衣服名称は登場しない。このように、同じ地方内でも衣服名称は多様であり、衣服に関する調査においては現地で村落ごとに確認する意義は大きいといえる。

衣服についてのコレクションは、首都アッリヤード (リヤド, al-Riyādh) のサウディ・アラビア国立博物館をはじめ、サフィーヤ・ビンザグル氏が設立した Darat Safeya Binzagr, ジッダの Al Tayibat City Museum for International Civilization, ターイフ (al-Tā'if) の Al Sharif Museum 等の私立の博物館において豊かなコレクションが確認できる (遠藤他 2021)。ただし、サウディ・アラビア国内の博物館では図録等が出版されていないところもあり、国外のコレクションについても注視することは重要である。

さかのぼれば、19世紀のアラビアを訪問した旅行家による女性の衣服の記録は、残念ながら大変表層的なものであるか、大きな誤解を招くものが大半であった (Ross 1981; Topham et al. 1982)。しかし例外として、ライデン大学民族学博物館 (The Museum Volkenkunde in Leiden), ライデン大学図書館 (The Leiden University Library) におけるコレクションが挙げられる。1870年代初頭から1950年まで、オランダの植民地化にあったインドネシアからの巡礼者に対応するためジッダにオランダ領事館が置かれ、その間に収集された貴重な資料が収録されている。例えば、19世紀後半のマッカ (メッカ, Makkah) での結婚式の模様や衣服について記録され、また当時の女性は日常着として“sidiriya”と呼ばれるブラウス, “sirwal” と呼ばれるズボンに、薄い肌着を身に着け、外出時は服の上に薄く透明なシルクまたは綿のガウン “milaya” とベールを羽織り、冬は厚手になると記述されている (Mols and Vrolijk 2016: 143)。さらに中流階級の女性は「マッカのベール」と呼ばれる白い顔覆い “burqa” を身に着けていたという (Mols and Vrolijk 2016: 145)。これらのコレクションは、体系的な整理と公開展示が積極的に行われており、2013~2014年にはオランダで展示会が開催された。

それ以外にも、アラビアの特徴的な伝統衣服への強い関心をもって個人が収集した豊かなコレクションが存在する。オーストラリア人のインテリアデザイナーである H. C. Ross は1969年以降サウディ・アラビア各地で衣服や装飾品等を収集し、伝統衣服の多くが西洋服にとって代われ失われつつあることに危機感を覚え、文化遺産として保存研究されるように、その歴史の変遷および地域ごとの特徴を詳細に記録した (Ross 1981)。アラビアの女性の伝統衣服について Ross (1981) は、表面的な外観から女性がどの集団に属するのかすぐに判別できるが、決まった部族のスタイルがあるとしても、刺繍する個人が独自の解釈をもちうるため、デザインと糸の色の配置に関する伝統的ルールの中なかでも微妙な違いが生まれると指摘している。ヒジャーズ地方の特徴としては、巡礼者が集まるマッカをかかえ、イスラーム以前から国際的に繁栄してきたため、移民の文化

から少なからず影響を受け、多様性に富んだ衣服や装飾がみられる (Ross 1981: 86-88)。そのなかで、ワーディ・ファーティマ地域の衣服としては、非常に精巧な顔覆いが特徴的で、サウディ・アラビア西部で最も長い顔覆いはワーディ・ファーティマ地域に住むハルブ族のサブセクションに属する人々のものであると述べている (Ross 1981: 93)。ハルブ族は、サウディ・アラビア中央部のナジュド (Najd) と西部のヒジャーズの全体で最大の規模をもつ部族の1つであり、もともとは南アラビアまたはイエメンから移住したともいわれる。支族 (subtribe) の連合体であり、1917年に紅海沿岸からナジュド西部までの広い領土を占領したが、国家が統一された後、生活形態が遊牧と定住に分かれていった歴史をもつとされる (Saudi Arabesque 2016)。ハルブ族の女性の衣服は基本的な形は一定であるが、多くの装飾のバリエーションが存在すると言う (Ross 1981: 87)。

またアメリカ人の建築コンサルタントである J. Topham は、1970年代後半以降、とくに織物に着目してサウディ・アラビアの衣服を収集し、そのコレクションはアメリカのロチェスター大学記念美術館等で展示された。コレクションが収録された著作において (Topham et al. 1982)、女性の伝統衣服は男性に比べて刺繍およびアップリケの色彩に優れ、顔覆い・頭飾りに付された装飾はより重く、地域差も大きいと指摘される。なかでも、ベドウィンの女性衣服の装飾は、村や都市の女性のものとは比べてまばらであることが指摘されている (Topham et al. 1982: 92; 94)。

19世紀後半から西洋の影響が増し、機械縫いが従来の刺繍に取って代わり、スタイルと装飾の標準化が進んだことにより、衣服における地域の違いが薄れていく傾向に拍車がかかっていった (Topham 1982: 94)。それに伴いアイテム (品目) のレベルで素材、形状、色、装飾の特徴に違いがみられる伝統衣服の学術的価値は高まり続けてきたといえる。1960年代末当時に片倉もところが行った調査の成果は、上記の研究においても引用され、衣服についての情報は、ある地域における人々の日常生活と衣服を紐づけた貴重な記録として評価されてきた (Ross 1981; Topham et al. 1982)。

Ross は、初版が出版された1981年前後のヒジャーズ地方では、大部分が農村地域であって、部族は伝統的な衣服にこだわり、何世紀も前と同じような生活を続けている地域がまだまだあるため、衣装の個々のデザイン要素を観察することで、外部の影響の度合いを測ることができる、と述べている (Ross 1981: 88)。一方、片倉もところは1960年代末当時すでに衣服の変化が進んでいたことをつぶさに観察していた。丹念に記録された衣服の変化は、急速に変化してきた社会における独自の様相を呈している可能性があり、そのバリエーションを記録することは重要である。

本稿では、片倉もところによるサウディ・アラビアの衣服コレクションについて、現地における再調査を含む再研究を進めた成果を報告する。なお、本稿で以降用いるアラビア語は、サウディ・アラビアとりわけワーディ・ファーティマ地域で話されている口語的アラビア語に準じる (縄田編 2019)。ワーディ・ファーティマ地域で話されるアラビ

ア語は、qをgと発音する以外は、古典アラビア語（正則アラビア語）に近い発音である（片倉 1974）。ただし、地名・人名・専門用語等で一般的に知られている名称がある場合は、括弧内にアラビア語のローマ字転写と共に明記する。

2 片倉もとこの衣服コレクションと関連資料

2.1 国立民族学博物館における片倉もとこが収集担当したサウディ・アラビアの衣服コレクション

片倉もとこは1981年より国立民族学博物館に所属していたが、1982（昭和57）年度の「海外標本資料等収集計画」における中東地域担当となった（片倉個人所有の辞令書）。そこで、サウディ・アラビアを含む西アジアに赴き、現地にて物質文化資料を収集した。その際、ワーディ・ファーティマ地域を再訪していることが片倉もとこの撮影写真記録から確認できる。収集された衣服（衣類・履物）としては、計63点が国立民族学博物館に収蔵されている（遠藤他 2021：表1）。

2.2 片倉もとこ個人の衣服コレクション

片倉もとこは、収集した衣服（衣類・履物）の一部を個人で所有していた。それらは現在、片倉もとこ記念沙漠文化財団の事務所において保管されており、計73点を数える（遠藤他 2021：表1）。衣服資料には、メモがほとんど付されておらず、なかには実際に使用された形跡が見られるもの、経年劣化の激しいもの、また製品として完成する前の生地や材料の段階にあるものも含まれている。

それらがサウディ・アラビアで収集されたものであるかどうかは、片倉もとこの著作内容および掲載写真との対照と、当時調査に同行することもあった夫の片倉邦雄へのヒアリングによってある程度確認することができた。ただし、ワーディ・ファーティマ地域で実際に使用されていたものであるのか、購入したのか、プレゼントとして片倉もとこが授与されたものなのかといった入手経緯、現地で使われている名称、使用方法等の詳細な情報は不足していた。したがって、新たな現地調査を通じて現地の人々の視点からの情報を得なければならないことがわかった。

2.3 郡司みさおの衣服コレクション

加えて、片倉もとこ記念沙漠文化財団の理事であり、建築家、インテリアデザイナーである郡司みさおが、かつて居住していたこともあるサウディ・アラビアにて収集し、所有している個人コレクション（以下、Gコレクション）がある。それらは、片倉もとこの衣服コレクションと対照し考察する資料として有用である。Gコレクションは、主に衣服や装身具で構成され、郡司が購入したものや、知人から譲り受けたもの等、入手

経緯は様々であり, 中には数十年前に使用されていたと考えられるものも含まれる。資料が整備されているものに関しては, 遠藤他 (2021) の表5および, 写真3~5として提示している (以下Gコレクションに関して言及する場合は参照)。

3 ワーディ・ファーティマ地域における衣服についての再調査

3.1 調査目的と方法

上記のとおり, 片倉もこの調査資料における衣服コレクションは, 学術資料としての価値が高く, 研究者本人による考察分析は十分に行われなかったことから, 再分析, 再調査する意義は大きいといえる。さらに, ワーディ・ファーティマ地域の社会変化を新たな軸からとらえられる可能性もあることから, 半世紀後の変化を追う現地調査において衣服に注目した。

伝統衣服についての調査の目的は, 国立民族学博物館, 片倉もこの記念沙漠文化財団のコレクションおよびGコレクションの衣服資料についての新たな情報, そして現地で保管もしくは現在も使用されている半世紀前の衣服についての情報を収集し, 半世紀の衣服の変化を人々の生活に即して考察することであった。

現地調査は, 2018~2019年にわたり計3回実施した (第1回: 2018年5月, 第2回: 2018年12月~2019年1月, 第3回: 2019年9月)。まず2018年5月の第1回調査では, 国立民族学博物館と片倉もこの記念沙漠文化財団が所蔵する片倉もこの衣服コレクションならびにGコレクションのサムネイル付リストを持参し, アイテム1点ごとに現地で情報を確認した。そこで得られた情報に加えて, 第2回・第3回調査では, 片倉もこの撮影した写真のなかで衣服の写っているものを現地の人々に確認してもらい, 人物や撮影地と共に衣服の特定を行った。そして, 現地で保管されていた半世紀前の衣服について, 実測採寸および写真撮影を行った (遠藤他 2021)。

調査地については, 片倉もこの地縁に着目した研究成果にもとづき, 世代による変化についての情報を得られる可能性のある村を選択し, 現地ではさらにバリエーションを広げて調査を実施した。具体的には, まず片倉もこの半世紀前に集約的に調査したブシュール村 (Bushūr), ブシュール村に隣接するものの両村の交流は限定されており社会的関係は薄いダフ・ザイニー村 (Daf Zayny), ブシュール村に多く住むハルブ族と親戚関係にある人々が住むシャミーヤ村 (Shāmīya, 片倉もこの結婚式に参加するため, 調査中に一度だけ訪問したことがあった), そして片倉もこの調査地に含まれていたもののブシュール村と距離的にも社会的にも離れたアイン・シャムス村 (‘Ain Shams), さらに片倉もこの調査地ではなかったが今回ワーディ・ファーティマ社会開発センターを通じて案内されたハルブ族が住むサムドゥ村 (Ṣamud) を対象とした (縄田他 2019: 21)。

調査対象者は、主に半世紀前から片倉もともと親交のあった女性とその親族・遺族であった。女性たちの家において、写真をもとに衣服の変化についてたずねるグループインタビューを実施した。現地から帰国した後も、SNSを通じて衣服の名称や発音についての情報の聞き取りを継続した。衣服の名称に関して現地の女性自身もしくは代理として親族の男性にアラビア語表記してもらおうと同時に、録音データにより発音を確認する方法をとった。

衣服の変化を探るためには、大きく分けて、性、アイテム、デザイン（色、素材を含む）、装飾に焦点をあてた。加えて、ブシュール村、ダフ・ザイニー村において、女性たちに半世紀の間の衣服の変化ならびに自身の人生における出来事（ライフイベント）と衣服の関係についてたずねた。

また情報を比較対照するため、ワーディ・ファーティマ社会開発センターの男女職員30名程度、サフィーヤ・ビンザグル氏、またAl Tayibat City Museum for International Civilization、ジッタ女子工業大学、ジッタ旧市街の市場にある衣服店においても聞き取りを行った。

本稿では以下、衣服の変化のバリエーションに着目して報告する。衣服の実測採寸および写真撮影した詳細の考察については、別稿にゆずる。

3.3 ワーディ・ファーティマ地域における半世紀前の衣服の特定

まず、半世紀前の衣服の特定にあたり、持参した衣服コレクションリストのサムネールを1点ずつ現地の人々に確認してもらい、当時ワーディ・ファーティマ地域で着ていた衣服があるかどうかをたずねた。結果、国立民族学博物館および片倉もともと記念沙漠文化財団が所蔵するものの中にある、と答えた人はいなかった。

一方、Gコレクションのリストから4点（G-C_046、G-C_004、G-C_003、G-C_015）が同地域で半世紀前に着用されていた衣服の同等品であるとの反応を得た（図1）。その内G-C_046は、当時とまったく同じのものであるとブシュール村、ダフ・ザイニー村での聞き取りにおいて指摘された。これは1989～1990年前半のアッリヤード市内の女子小学校にて、郡司がチャリティー・アンティークバザーを通じて入手し、ジッタ方面のアンティークだとの説明を受けたものである。G-C_004、G-C_003、G-C_015の3点については、2015年、在京サウディ・アラビア大使夫人より郡司に授与されたもので、ジッタあたりの古い伝統衣服であるとのことだった。



図1 ワーディ・ファーティマ地域で1960年代末に着用されていた衣服の同等品 (2019年2月藤原一徳撮影, G-C_015のみ2017年郡司みさお撮影)

3.4 ワーディ・ファーティマ地域における衣服名称の特定と分類

次に、片倉もとこフィールド調査写真をもとに被写体の衣服の名称についてたずねたところ、75枚の写真における衣服についての情報を得ることができた。地域別の枚数は、ダフ・ザイニー村 (49枚)、ブシュール村 (10枚)、アイン・シャムス村 (4枚)、シャーマーミーヤ村 (12枚) であった。具体的な衣服のアイテムの名称について系統立てて調査できたのはダフ・ザイニー村とブシュール村であった。サムドゥウ村は、片倉もとこの調査地ではなかったため、ハルブ族の多いブシュール村やシャーマーミーヤ村の写真をもとに衣服の変化について聞き取りを行った。

本稿では衣服の名称を整理するにあたり、片倉もとこが用いたアイテム別での分類を採用し、またRoss (1981) におけるアイテムの整理基準と順序を参考に一覧をまとめた (表1)。飾面や装身具類は、半世紀前シャーマーミーヤ村に住んでいたハルブ族の支族であるブシュリーの人々への聞き取りから得た名称を記載しているため、国立民族学博物館および片倉もとこ記念沙漠文化財団の所蔵資料一覧 (遠藤他 2021: 表2・3) には記載のないものもある。なお片倉もとこは、著作において分類の基準を異にしていることに注意が必要である。半世紀前の集約的調査を人文地理学の観点からまとめた『*Bedouin Village*』と文化人類学的観点からモノグラフとしてまとめた『アラビア・ノート』があるが、男性の衣服については、「町のアラブ」と「沙漠のアラブ」として、それぞれ一連のセットを説明している (Katakura 1977: 77-79; 片倉 1979: 54-57)。一方、女性の衣服は、前者は支族ごとにアイテムのセットを記述しているのに対し (Katakura 1977: 79-81)、後者ではアイテムごとに記述している (片倉 1979: 58-62)。本調査では、半世紀後の変化の考察を目的としており、50年前と同じ支族集団の変化を対象とすることは現実的ではないと考えたため、後者を採用した。

表1 ワーディ・ファーティマ地域における衣服および衣服部位の名称（アラビア語名称（カタカナ表記）は、ワーディ・ファーティマ地域で過去に使われていた名称（現在ワーディ・ファーティマ地域周辺で一般的に使われている名称）／古典アラビア語の順に示す。ただし過去と現在とで差がない場合は、ワーディ・ファーティマ地域とその周辺の名称／古典アラビア語の順、すべてが同じ場合は一語で示す）

日本語対訳	アラビア語名称 (原語表記)	アラビア語名称 (カタカナ表記)
頭覆い	شَرْشَف	シャルシャフ
頭覆い	مُصْنُون	ムスワン
頭覆い	مُصْنَر	ムスル
頭覆い	مَصْر	マサル
頭覆い（未婚女性用）	صُمَادَة	スマータ
頭覆い	طَرْحَة / طَرْحَة	タラハ（タルハ）／タルハ
頭覆い止め	مُنَوْرَة	ムダウワラ
頭覆い止め	وَقَايَة	ウイガーヤ
飾面	نِقَابُ	ニカーブ
飾面	بُرْفَع	ブルグア／ブルクア
貫頭型長衣	ثُوب / ثُوب	タウブ（トープ）／サウブ
長衣	فُسْتَان	フスターン
長衣	كُرْتَة	クルタ
外着	عَبَاءَة / عَبَاءَة	アバーヤ／アバーア
外着	مُسَدَّح	ムサッドフ
外着	مَخَارِيد	マハーリード
外着	ثُوبُ حَرَبِي	タウブ・ハルビー
外着	مُضْحَاة / مُضْحَى	ムドゥハー
袖	كُم	クム
胸前垂らし布	مِخْرَمَة	ミフラマ
上半身用肌着	صَنْدْرِيَة / صَنْدْرِيَة (سَنْدْرِيَة)	スドリヤー（シディーリーヤ）／スタイリーヤ
下半身用肌着	سُرْوَال / مِزْوَال	スルワール／シルワール
平銀糸入り組紐	تَلْ	ティッル／トウッル
飾面の鼻部分につけるコイン	فُرُوش	グルーシュ
飾面の鼻部分の部位	قَرْم	ガッルム／カッルム
飾面の飾り房の部位	مَطَاوِيح	ムターウィーフ
飾面のボタン飾り	صَنْف	サダフ
飾面下部の粒銀細工	رُوند	ズワンドゥ
飾面下部の中央や左右に取り付けられた三角形の細線細工を施した銀製装飾品	رِزَايِن النَزَق	ラザーイン・アル＝ブルグア
腕輪	الشَمِيْلَة	シミーラ
腕輪	بُنْجَرَة	ブンジャラ
指輪	خَاتِم	ハーティム
足指輪	خَاتِم الْبِهَام	ハーティム・イブハーム
四角いペンダントトップ	خَنْمَة	ハトゥマ
三日月型ペンダント	نِيشَان	ニーシャーン
	الهَلَال	アル＝ヒラール
首飾り	لَاژِم	ラージム
頭飾り	خُرْسَان	フルサーン
ベルト	حِزَام	ヒザーム
男性用上半身用肌着	فَانِيْلَة / فَنِيْلَة	ファニーラ（ファニーラ）／ファニーラ
男性用下半身用肌着	سُرْوَال / مِزْوَال	スルワール／シルワール
男性用腰ひも	دَكَّة	ダッカ
男性用腰布	فُوطَة	フータ

日本語対訳	アラビア語名称 (原語表記)	アラビア語名称 (カタカナ表記)
男性用シャツと男性用スカートのセット	رُثِيِيَّة	ウドニーヤ
	عَدْنِيِيَّة	アダニーヤ
ガウン	مِشْلَح	ミシュラフ
ガウン	بِشْت	ビシュトゥウ
帽子	كُوْفِيِيَّة	クーフィーヤ
帽子	طَاقِيِيَّة	ターギーヤ
男性用頭覆い (赤白チェック柄)	شِمَاغ	シマーグ
男性用頭覆い (模様がなく白地のみ)	غُتْرَة	グトゥラ
男性用頭覆い	أَخْرَام	アフラーム
頭紐	عَقَل	イガール/イカール
サンダル	شِبْشِب	シブシブ
サンダル	شِبْشِب شَرْقِيِيَّة	シブシブ・シャルギー

3.5 衣服名称の取扱いについて

本稿では、衣服名称において、ワーディ・ファーティマ地域で過去に使われていた名称、ワーディ・ファーティマ地域およびその周辺で現在一般的に使われている名称、古典アラビア語（正則アラビア語）の名称と、3つの名称を併記する必要がある場合には、ワーディ・ファーティマ地域で過去に使われていた名称（現在ワーディ・ファーティマ地域周辺で一般的に使われている名称）／古典アラビア語（正則アラビア語）の名称の順に示す（例：タウブ（トープ）／サウブ、タラハ（タルハ）／タルハ、スドリーヤ（シディリーヤ）／スダイリーヤ）。ただしワーディ・ファーティマ地域もしくはその周辺地域で過去と現在とで使われていた名称がとくに差がない場合は、ワーディ・ファーティマ地域もしくはその周辺地域で過去と現在とで使われていた名称／古典アラビア語（正則アラビア語）の順に示す（例：ブルグア／ブルクア、アバーヤ／アバーア）。

名称における半世紀の変化、現地発音と古典アラビア語の違いに加えて衣服の名称についての記録を解釈分析する際には、調査者と調査対象者（被調査者）の関係が反映されることに注意しなければならない。調査対象者が衣服の名称についてたずねられたとき、正式名称を答える場合もあれば、実際に使用している現地での通称を答える場合もある。また、専門的知識を持っていて専門用語を答えるときもあれば、よく知らず一般的な総称を答える場合も考えられる。調査対象者にとっては、質問してきた相手が研究者なのか、友人なのかによっても返答は異なりうる。

さらに、今回の現地調査は、片倉もとこが半世紀前に聞いた記録をもとに、新たな調査グループが聞き取りを行ったため、世代による違いも考慮する必要がある。同じ衣服に対して、過去に何と言われていたかたずねた場合でも、対象者の世代によってその通り過去の名称で答える人もいれば、それを知らず現在の名称で答える人もいる可能性がある。

表1の成果は、オリジナルの調査者、調査対象者、さらには新たな調査グループとその調査対象者という4つの存在があり、どのように質疑応答するかによって、またそれぞれの関係性によっても、得られる情報は異なるという実例である。つまり、聞き取りをした地域、人物や、調査者・調査対象者の知識の度合いや交流の深さによっても得られる情報は異なるといえるだろう。

そこで、名称を記録する際には、調査対象者についての情報も記録しておくことが重要である。また、得られた情報の検討も重ねていく必要がある。

4 ワーディ・ファーティマ地域における衣服の半世紀の変化

ワーディ・ファーティマ地域における男性と女性の衣服は、白を基調とした衣服は男性、黒や色柄を基調とした衣服は女性という点で差は明確である(縄田/メレー 2019)。ただし色合い以外の点では、男性用の衣服の形態や種類は同じく概して変わっていないのに対して、女性用の衣服は外着・内着・肌着、頭・髪覆い、飾面ともに変化した点が多い。

以下、表1(アラビア語名称の原語表記とカタカナ表記、その日本語対訳)をもとに、性別における衣服の半世紀の変化を性別に着目して具体的に記述する。なお衣服以外の飾面や装身具については、本稿では名称のみ表に記載し、別稿で考察する。

4.1 男性の衣服

男性は、体に合うようにあつらえた袖の長いゆったりとしたひとつなぎの貫頭型長衣タウブ(トープ)/サウブ(thaub/thoub ثوب/ثوب)を着る。白地がほとんどであるが、青や灰色のものもある。丸首ではなくスタンドカラー(もしくはワイシャツカラー)で襟止めもあり頸部まで覆えることが特徴である。タウブは内着と外着の兼用である。タウブの下に着用する肌着は、上シャツのファーニーラ(ファニーラ)/ファニーラ(fānīla/fanīla فنييلة/فانييلة)と下ズボンのスルワール/シルワール(surwāl/sirwāl سُرْوَال/سُرْوَال)があり、腰回りにはダッカ(dakka دَكَّة)というひもを巻いた。室内では、下ズボンとして巻スカート状のフータ(fūṭa فُوطَة)で過ごす人もいる(縄田・アナス 2019)。

山岳部ではなく平野部が多いため、それほど夜や冬季も冷え込まないワーディ・ファーティマ地域では、タウブの上に羽織る外衣ミシュラフ(mishulah مِشْلَاح)もしくはビシュットウ(bishuttu بِيْشْت)をもっていない人が多かった。半世紀前には、ウドニーヤ(wdniya وُدْنِيَة)またはアダニーヤ(‘adaniya عَدْنِيَة)という外着を農作業用に着る人もいたが、当時すでに「オールドファッション」(片倉 1979: 56)とみなされていた。本調査では、着用する人に出会うことはなかったが、社会開発センターの職員が自宅に保管していることが判明した。なお、衣服の呼称について、アラビア語著作におい

て رُنْبِيَّة (Katakura 1996: 112; 113) と表記されているが、ローマ字転記では wdnīya (Katakura 1977: 77-78) また日本語著作ではウドニイヤ (片倉 1979: 54; 56) となっていることから考えると、アラビア語は誤植の可能性が高いと判断される。一方、アダニーヤ (‘adanīya عَدْنِيَّة) は、本調査にて、シャーミーヤ村の男性からアラビア語での呼称を聞き取り、ローマ字、日本語に転記した。よって、この衣服名称については比較対照を含めさらなる調査が必要と考えている。

また、ハルブ族の人々には、長く垂れさがる袖が特徴的なマハーリード (mahārīd مخاريد) という伝統的な衣服があり、女性にも同様の袖部分がある同じくマハーリードと呼ばれる外着・晴れ着があった。

頭部から頸部にかけては、クーフィーヤ (kūfīya كُوفِيَّة) もしくはターギーヤ (tāgīya طَاقِيَّة) と呼ばれる帽子をかぶり、正方形の布を対角線で折り込み三角形にしたもので覆う。どちらも色合いは白が基調である。布のうち、赤のチェック柄が入ったものはシマーグ (shimāgh شِمَاغْ) 模様がなく白地だけ (縁に刺繍・模様がつかう場合はある) のものはアフラム (ahrām أَحْرَام) もしくはグトゥラ (ghtra غُتْرَة) と呼ばれる。シマーグやグトゥラをしっかりと留めるために、当時はシャッターファ (shattāfa شَطَّافَة) と呼び (片倉 1979: 57)、現在ではイガール／イカール (‘igāl / ‘iqāl عِقَال / عِقَال) と呼ばれる輪状のヘアバンドをあてることが多い。外出時には、子供は帽子だけの場合も多くみられるが、成人男性はシマーグかグトラを着けることが普通である。

履物は、シブシブ (shibshib شِبْشِب) と総称されるかかとの部分がみえているサンダルを履く。そのうち、シブシブ・シャルギー (shibshib shargī شِبْشِبْ شَرْقِيَّة) と呼ばれる皮革製で足の甲の一部が覆われているタイプがある。

4.2 女性の衣服

ワーディ・ファーティマ地域において、女性の衣服は内と外、日常と非日常とで異なっていた。自宅内で常時着用する日常着としての「内着」、外出時にその上に羽織るよそゆきとしての「外着」、さらに年に数回の祭事や結婚披露宴に向かうときに着用する「晴れ着」があった (郡司他 2019a)。

しかし、多様で色彩にあふれた伝統的な晴れ着や外着は、半世紀の間に衰退し、黒いアバーヤ／アバーアに一元化していった。頭や髪を覆う布も、ムスワン等は姿を消し、黒無地、長方形の一枚布タラハ (タルハ) / タルハが用いられるようになった。顔の部分を隠す飾面ブルグア／ブルクアは、色とりどりで装飾が豊かであったものから、シンプルな黒い布製で目の穴が2箇所開いているブルグアや、両目部分が細長くひとつの穴になっただけのニカーブが使われるようになった。

外観からみた色合いはカラフルなものから黒単色になったといえる。しかし、アバーヤの下にはジーンズやワンピース等のカラフルな洋服を着ている人も多い。また、晴れ

着としての外着は衰退し、晴れ着はもっぱら内着となり、アバーヤの下に華やかな西洋風ドレスが着られるようになっていく。履物としては、半世紀前から使われていたサンダルに加え、ハイヒール、スニーカー等多様な履物が履かれるようになった(郡司他 2019e)。

片倉もとこの著作や写真を参考に、2018～2019年にかけてブシュール村、ダフ・ザイニー村、シャーミーヤ村、サムドウ村、アル＝ジュムーム (al-Jumūm) 市等で改めて聞き取り調査を行ったところ、およそ半世紀前のワーディ・ファーティマ地域では、女性の衣服はより多様で多くの名称も存在したことが分かった。

そこで本稿では、調査後にまとめられた縄田編 (2019) をもとに、より詳細な情報を加えて記述する。

4.2.1 頭・髪覆い

シャルシャフ (sharshaf شَرْشَف)

大きな薄い生地一枚布で、正方形のショールである。ときには敷布くらいのものである。頭・髪覆いの上にさらに被る場合もあり、眼以外を覆う。ダフ・ザイニー村等の一部地域の女性が主に着るもので、カラフルなものや花柄が好まれた。礼拝のときに使用する場合もあれば、昼寝するときには身体に掛ける場合もある。

家の中庭に出るときは当然ながら、室内においても常にシャルシャフを身に着けてい



写真1 透ける生地の既婚女性用衣服ムサッダフの上にシャルシャフをかぶった片倉もとこ
撮影：不明，1974年，ダフ・ザイニー村，KM_5570

る女性もいる。頭覆いの上にさらにシャルシャフを被る場合もある(写真1)。シャルシャフは現在でも存在し、同じ名称で呼ばれるが、外出時に着用はせず、室内において使われている。

また、シャルシャフをくるくると丸め、紐状の頭覆い止めとして、使用することもあり、この場合はウィガーヤと呼ばれていた(後述)。なお、シャルシャフは髪の毛から上半身を覆うものであるが、ダフ・ザイニー村ではかつて、成人女性が同じシャルシャフをくるりと顔にも巻いて、目だけを出す顔覆いとしての役割も担っていた。

ムスワン (muṣwan مُصْنُون)

晴れ着の頭・髪覆い。シャーミーヤ村の50才代の女性から、かつて着用していたものとして説明された。重量感のある黒い無地の布で作られ、縁取りにティッル／トゥッルという平銀糸入りの組紐ブロードテープを使用しているのが特徴である。また、貝ボタンまたはプラスチックボタンもたびたび、装飾に使用された。生地は細番手の綿をきつちりと織った、綾織の黒い先染め生地を使用している。名称は確認できなかったが、Al Tayibat City Museum for International Civilizationでも同等品が多く陳列されていた(図2)。



図2 ワーディ・ファーティマの振袖型晴れ着と頭・髪覆いのムスワン (イラスト：郡司みさお)

ムスル (muşur مُصْر)

ムスワンの下に、髪の毛をきっちりととめるための既婚女性用の頭覆い布。シャーマーヤ村において半世紀前に使用されていた。後述のスマーダと似たようなデザインだが、顎の下の縫い目がとても短く、あえて首飾りを見せられるようになっていた。

マサル (maşar مَصْر)

ムスルと同じく、既婚女性用の頭覆い布を指す。ブシュール村で半世紀前に使用されていた。

スマーダ (şumāda شُمَادَة)

およそ半世紀前、ダフ・ザイニー村等の一部地域の未婚女性が水くみ等の外出時に頭からかぶった布を指す。厚い生地で作られ、顔の部分のみ穴があいており、あごの下で縫い合わされている。裏地を付けて分厚くして使用される場合もあった。腰あたりまでのタイプからひきずるタイプもあり、中には背丈の3倍ほどの長さのものもあった (片倉 1979: 61)。

他の頭覆いとは違い、頭から被るだけで安定し、結び目がほどけてしまうことも、ずり落ちることもない。他の中東地域でも同様の形状のものが見られるが、いずれも未婚女性や学生がつけることが多い。色柄は、赤系の花柄が好まれた。井戸に水汲みに行く



写真2 スマーダをかぶった女性

撮影：片倉もとこ，1971-1974年，ダフ・ザイニー村，KM_5578

際や，外で遊ぶときに着用し，頭の上に折り上げる等する。

スマーダは，半世紀前にブシュール村，シャーミーヤ村，ダフ・ザイニー村で使用され，現在も名称は知られているが着用はされていないことが分かった（写真2・3）。サムドゥウ村では，スマーダを知っている女性はいなかった。

タラハ（タルハ）／タルハ（*ṭarāḥa / ṭarḥa طَرَّحَة / طَرَّحَة*）

薄地で長方形（通常60～80cm×150cm程度）の一枚布の頭・髪覆い。砂や風が鼻や口に入るのを防ぐ他，性的誘惑からお互いを守り，髪の毛を隠すためのものでもある。約半世紀前，多くはカラフルな色あいで，柄物等も多様に広く使用されていた（写真1）。現在までサウディ・アラビアにおいて一般に使用され，色は真黒なものが多い。

シャーミーヤ村では，カラフルなタルハを着用しているのは少女たちで，成人女性たちはムスワン（前述）で頭や髪を覆っていた。一方，ダフ・ザイニー村では，タラハ（タルハ）／タルハは成人女性も少女も着用し，タラハ（タルハ）／タルハとシャルシャフを重ね使いしている場合も多かった。

4.2.2 頭覆い止め

ムダウワラ（*mudawwara مُدَوِّرَة*）

女性が髪の毛の先の方にガーゼの紐を織り込んで三つ編みにし，それをくるくると巻



写真3 スマーダをかぶった少女たち

撮影：片倉もとこ，1969年，ブシュール村，KM_0644

きつけてマハルマと呼ばれる輪を作り、その上におでこからきっちりと髪の毛を隠すように載せる髪覆いの布、もしくは左右に紐のついた厚手または綿の入ったハチマキ状の布である。これを頭上で縛ることで、頭の上に置く水を運ぶ容器や荷物が安定し、また頭覆い布がずれ落ちないという利点があった。また、髪の毛を確実に隠すことができた。特に未婚者は絶対に髪の毛を見せないことがよしとされた（片倉 1979: 60-61）。

ダフ・ザイニー村で半世紀前に使用されていたが、現在も使っているという声は聞かれなかった。ジッダ都市部でも同じ名称で広く使用されていたと、2018年末にサウディアラビア国内で開かれたジャナドリーヤ祭（正式名称は「国家遺産と大衆文化の祭典」）のヒジャーズ館案内担当者から説明を受けた。

半世紀前のダフ・ザイニー村では、ムダウワラは他の衣服などと色を合わせることに意識され、鮮やかな色彩を特徴としていた。ムダウワラの上には、主に既婚者はシャルシャフ、未婚者はスマータ等の頭覆いを載せることが一般的であったが、女兒の場合はムダウワラをつけず、頭の上に直接スマータを付けている例も多かった（写真1・3）。

ウィガーヤ (wigāya وَغَايَا)

ダフ・ザイニー村において使用されていた、頭覆い布であるシャルシャフを頭覆い止めムダウワラの代用として使用したときの呼称。シャルシャフをくるくると円柱状に硬めに丸め、さらにそれを頭上で渦巻状にし、さらに最後の部分を渦巻の中央に押し込む。この状態でブリキ缶の斗缶タナカ等の水を運ぶ容器を頭の上に置くと、安定したという。

同村での調査で、写真1を見せながら衣服の名称を確認した際、60才代と思われるある女性は、頭に被っている白地に花模様の布を指して、これはムダウワラだと言い、他の数名の女性は否定しウィガーヤだという、見解の相違があった。

この白地に花柄の生地は、他の写真でもたびたび登場しており、片倉もこのインフォーマントであった女性が好んで使用していた。ある写真の中では、彼女の頭の一番内側にムダウワラ代わりにウィガーヤとして、その花柄の布が巻かれ、その外側には別の大きなシャルシャフが2枚載っていた。つまり、日ごろムダウワラ（ハチマキ状の頭覆い止め）代わりにウィガーヤとして使用しているシャルシャフのことを、いつの間にか、ムダウワラと呼ぶようになったと推測できる。衣服には様々な側面、用途があり、ときには用途が変わると呼称が変化する例と考えられる。

4.2.3 顔覆い（飾面）

ニカーブ (niqāb نِقَاب)

黒い布の、両目部分だけを細長く長方形に切り抜いた形状の顔覆い。なお、同じ呼称でも、国や地域によって様々な色、形がある。

ただし、半世紀前のワーディ・ファーティマ地域での片倉もところによる調査ではニカーブへの言及はなく、再調査の聞き取りにおいても半世紀前に使用されていたものとして挙げられることはなかった。

一方、現在のサウディ・アラビア女性の多くは常用している。昨今は、ほとんど外から目が見えないように、目を覆う別布の付いたタイプや、または細長い1つの穴が目の部分に開いたものを指すことが多い。ドレープ性のあるとろりとした質感の、黒い薄手・無地の生地を使ったものがほとんどで、生地質はビスコース、ポリエステル等の合繊が主流である。顔面を隠す布の左右に紐がついていて、頭の後ろで結ぶようになっているが、21世紀に入ってからの若い女性の流行として、頭・髪覆いの布を掛けたあと、その上からニカーブの紐を後ろで結びしっかりとめるようになってきた。この方法だと頭・髪覆いの布がずり落ちるのを防げる上に、顔が小さく見えるという(図3)。



図3 過去と現在の衣服の種類の変化(作成:郡司みさお, 遠藤仁)



写真4 ブルグア (MKFDC_0003) の右側面と左側面 (2019年2月遠藤仁撮影)

ブルグア／ブルクア (burq'a بُرْقَة)

顔を覆う飾面で、この地域では主にプシュール村、シャーミーヤ村、サムドゥ村の女性たちが使用していた。一枚の布で目の部分だけ2箇所長方形の穴をあけ、頭の後ろで紐をしぼり固定する。約半世紀前頃に使用されていたハルブ族のブルグア／ブルクアには、大変個性豊かな装飾品やコイン、ボタン、刺繍が施され、頭の後ろで羊革の紐を縛るようになっていた(片倉 1979: 61-62)。穴は細めであるが、中から十分に外が見える。

女性たちは母親がつくってくれたものに加えて、自分でつくったり、新たに購入したりして複数所有し、日常用、結婚式用と用途に応じて使い分けていた(写真4)。現代において、一般的な女性を使用しているブルグア／ブルクアは、ニカーブと大変良く似た形状であり、生地質もニカーブと同様にビスコース、ポリエステル等の合繊が主流で、着け心地もほぼ同じである。しかし大きな違いとして、ニカーブの目の部分の穴は1つだけで、両目をカバーする細長い長方形であるのに対し、ブルグア／ブルクアは鼻筋部分に黒い細い生地が縦に付いているため、目の穴が2つになっている。このような形状のブルグア／ブルクアを、ベドウィン・スタイルだと説明する若い女性もいる。

4.2.4 内着

タウブ (トープ)／サウブ (thaub / thoub ثَوْب / ثَوْب)

既婚女性が主に着用する、直線裁ちのたっぷりとした貫頭型長衣。刺繍等が施される場合もある。半世紀前のプシュール村、ダフ・ザイニー村では、男性、既婚女性が各々着用する内着(外着として着る場合もあった)を総称していた(片倉 1979: 70; 74-75)。現在では、主に男性の白い貫頭型長衣を指すようになり、一部年配女性が着つけている状況である(図3)。

フスターン (fustān فُسْتَان)

主に未婚女性が着用する、ややハイウエストで切り替えがあり、スカートにはギャザ

ーが入った貫頭型長衣の内着（外着としても使用可）。裾にむかって広がる形をしている（図2）。フリルやレース，刺繍，ブロードテープ等が施され，華やかなデザインが多い。生地はプリントやジャガード織り等様々なタイプがあり，柄は花柄が人気であった。ブシュール村，ダフ・ザイニー村で使用され，8～9才くらいまでの女兒が外出する際，半世紀前も現在も，外着を着ずにフスターンのまま外出するのが通常である（図3）。

現在でもフスターンという言葉は一般的にワンピースを示す言葉として使用されており，未婚者のみが着用するものと限定されなくなっている。またかつては，くるぶしまでの丈の貫頭型長衣を指していたが，現在では，丈に限らずワンピースを指す場合もある。言葉としては残っているが，差し示す対象の幅が広がりつつある例である（郡司 2019d）。

クルタ（kurta كُرْتَا）

ハイウエストで切り替えがあり，スカート部分には控えめなギャザーが入った，シンプルな貫頭型長衣。礼装もしくは準礼装であるフスターンに対して，クルタは普段自宅にいるときの普段着である。フスターンとほぼ同様の形状のものもあるが，生地質がジャカード織りで金糸が入っていたり，光沢感のあり華やかな多色使いの大きな花柄だったり，高級感，豪華さが感じられるものをフスターンと呼び，平織の木綿生地で小柄やストライプ柄が入っている程度のもは，クルタと呼ぶ。衣服名称を聞き取る際，同じ衣服についてクルタかフスターンかで見解が分かれる場合もあった。

なお，クルタという呼称は現在も残っているが，若い女性の中には知らない人もいた。

4.2.5 外着

アバーヤ／アバーア（‘abāya / ‘abā’ah عِبَاءَة / عِبَائِيَّة）

黒い生地のできた，前開きの長衣。ブシュール村の女性からの聞き取りによると，約半世紀前は，それぞれの村，それぞれの部族が特有の伝統衣服を着ていたが，ジッダ等の町に出かけるときには，黒いアバーヤ／アバーアを被っていた，という（片倉 1979: 63）。

現在のサウディ・アラビアにおいて，ほぼすべての成人女性が外出時にアバーヤ／アバーアを着用している。半世紀前は，大きな布を生地巾いっぱいを使い，頭からすっぽりとかぶり足首までをしっかりと隠していたが，現在は，頭からではなく，肩にかけるコートタイプが主流となっている（図4）。袖がつくようになり，前開きの部分にはスナップボタンやファスナー等が付いて，活動しやすいデザインが増えている（郡司 2019c）。

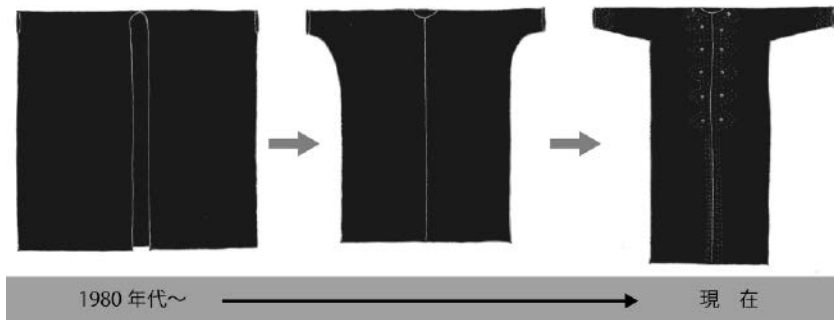


図4 黒い外着アバーヤの形の変遷（作成：郡司みさお，遠藤仁）

ムサッドフ (musaddah مُسَدَّح)

生地巾をそのまま使用し、四角く仕立てた、既婚女性用の重ね着・外着（貫頭型長衣）。オーガンジーのような透過性のある生地を使用するが多い。内着の上にもう1枚羽織るもので、外出時や結婚式等で着用された。ただ、現在のアバーヤ／アバーアのように、室内に入るとすぐに脱ぐのではなく、室内でも着用していた。夜会のときには母親が赤ん坊をあぐらをかいたひざの上のせてあやす光景がよくみられ、赤ん坊の上からふわっとかぶせて砂や風、虫等から守ったり、その中で授乳したりするのにも役立っていた。本調査にて聞き取りに参加したワーディ・ファーティマ地域の村々、ワーディ・ファーティマ社会開発センターの女性たち全員から、ムサッドフという呼称を使っていることを確認した。また世代を問わず、年配から20才代と思われる若い女性もこの呼称を知っていた。

ムサッドフに金色の刺繍を施したタイプは、サウディ・アラビア中央部のアッリヤードやアラブ首長国連邦等の湾岸地域でも広く使用されていた。ワーディ・ファーティマ地域のサムドゥ村では、現在でも結婚式のときには女兒たちが、金刺繍入りの赤や緑のオーガンジー生地のムサッドフを着用して踊るといふ。

なお、サフィーヤ・ビンザグル氏から、写真1の衣服に対して、この四角い衣服の「形状」をダハーシミー (dahāshimy دَحَاشِيْمِي) と呼び、刺繍の種類によって呼称が異なる、との説明を受けた（たとえば綿ガーゼでできたタイプは、サウブ・アル＝ハーシミー (thaub al hāshimy ثَوْبُ الحَاشِيْمِي)）。しかしワーディ・ファーティマ地域での聞き取りでは、どの村においてもその呼称は挙げられなかった。

マハーリード (もしくはムドゥハー， タウブ・ハルビー)

(mahārīd, muḍhā, thaub ḥarbī مَحَارِيْد، مُضْحَاة / مُضْحَى، ثَوْبُ حَرْبِي)

細長い振袖状の袖が取り付けられた黒い貫頭型長衣で、晴れ着・外着である。刺繍，

アップリケ, キルトがたっぷりと施されており, それらはハルブ族の特徴的なデザインと考えられる。女性が結婚するときに実家から持参し, 結婚式や祭りのときに着用した。マハーリードは, シャーミーヤ村での呼称であり, 毎年1着, イード(断食明けの祭りイード・アル=フィトルと犠牲祭イード・アル=アドハー)に合わせて家族全員のために手縫いで新調したという(図1)。

また, 同様の形状の衣服を, プシュール村ではムドゥハー, サムドゥ村ではタウブ・ハルビーと呼んでいた。ワーディ・ファーティマ社会開発センターに展示されていた衣服に同等品があるが, 名称は記録されていない。

シャーミーヤ村, プシュール村では保管している人が見つからず, シャーミーヤ村では40年ほど前に使用されなくなったと説明を受けた。サムドゥ村では70才代の女性が, 着用してはいないが保管していた。

4.2.6 胸前垂らし布

ミフラマ (miḥrama مِخْرَمَة)

胸の前あたりに垂らす布地で, 外着のムサッタフと共布で作られることもある(写真1)。ダフ・ザイニー村において, 半世紀前に使用し, ジッダでも使用されていたものと説明を受けた。よって, 広範囲で使用されたものであると考えられるが, 現在も着用しているという話は聞かれなかった。

4.2.7 上半身用肌着

スドリーヤ (シディーリーヤ) / スダイリーヤ

(ṣudrīya / sidīriya / ṣudayrīya / صُنْدْرِيَّة / سِيدِيرِيَّة / صُنْدْرِيَّة)

主に平織の綿生地, または綿のガーゼでできたブラウス兼ブラジャー。手作りの色付き普段着から, 上等な白い薄手木綿(細番手のエジプト綿)製のものまでバリエーションがある。かつては上等なタイプの場合, ボタンに本物の金を使用し, 女性が財産を持ち歩くことを意味した(片倉 1979: 59)。また, 襟元, 袖口のカフス回り, 前開き部分等にカットワーク刺繍等の装飾が控えめに施されているものもある(写真1, 図5)。本調査において, 現在も使用しているという女性はいなかった。

衣服の呼称について, 片倉の著作によればアラビア語およびその英語転写ではスドリーヤ(ṣudrīya صُنْدْرِيَّة)である(Katakura 1977; 1996)一方, 日本語ではスダイリーヤ(ṣudayrīya سِيدِيرِيَّة)となっている。なおシディーリーヤ(sidīriya سِيدِيرِيَّة)は本調査から得たシャーミーヤ村での呼称である。

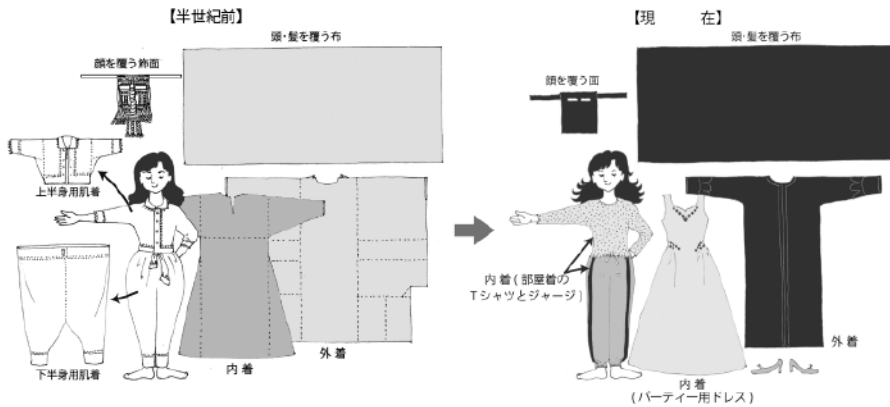


図5 女性の外着，内着，肌着の変化（作成：郡司みさお，遠藤仁）

4.2.8 下半身用肌着

スルワール／シルワール (sirwāl / surwāl / سِرْوَال / سِرْوَال)

腰から大腿部はたっぷりとしていて，足首が細く詰まった形状をしていることが特徴のズボン形肌着。腰回りは紐で縛られているため，細目の人から妊婦までフリーサイズといえる。片膝立ちのあぐらをかくとき，またはお祈りをするときにも動きやすい。

気温が高くなると，男性に比べて女性は生物学的に大腿部の皮下の血流が増えて，汗をあまりかかなくても，ここから伝導や輻射で熱を放出することができるような構造になっている。つまり，この肌着の形は，大腿部から出た熱をこもらせず逃がしやすいため，暑い時期を快適に過ごすためにも理にかなっている（郡司・坂田 2019）。さらに，虫や砂埃等の侵入を防ぐため，足首部分が細くすばまっている。

また，プシュール村とダフ・ザイニー村では，家庭内では内着を着ずに，上半身用のスドリーヤと下半身用のスルワール／シルワールのまま過ごすこともよくあったという。特に高年齢の女性には多く見られたという。プシュール村では，スルワール／シルワールは着心地がよいので，現在も使っているという60才代の女性もいた（写真5）。



写真5 下半身用肌着スルワール

撮影：片倉もところ，撮影年月不明，ダフ・ザイニー村，KM_5015

5 ワーディ・ファーティマ地域の女性の衣服とライフコース

前節までの衣服の特定，名称の特定作業をもとに，本節では着用するシーンによる衣服の変化，そしてライフコース（個人が歩む人生の道すじ）における加齢に伴う衣服の変化について年齢段階ごとにまとめる。

5.1 晴れ着と日常着の変化

アイテム別の衣服変化を踏まえて，半世紀前のワーディ・ファーティマ地域におけるシーン別の衣服の変化について日常着と晴れ着の違いとしてまとめると，まず日常着は，色鮮やかな貫頭型長衣のフスターンや，タウブ（トープ）／サウブ等の上に，頭や髪を覆う布シャルシャフ，もしくはムスワンやスマダを被ることが一般的であった（郡司他 2019a）。

ワーディ・ファーティマ地域の振袖型晴れ着には多様なバリエーションがある。黒い生地には，振袖のような長い袖が付いたゆったりとした形状と，首から肩周り，胸の部分，裾の部分に施されたアップリケや刺し縫いの刺繍が，共通してみられる特徴である。

袖は一般的にクム（kum كُم）と呼ばれるが，この振袖のような長い袖はムドゥハーと呼ばれる。転じて，プシュール村では長い振袖状の袖をもつ衣服自体がムドゥハー

と呼ぶようになったと考えられる。この振袖型晴れ着は、すべて手縫いでつくられ、その呼称はムドゥハー以外にも村によって様々な名称が確認され、シャーミーヤ村ではマハーリード、サムドゥ村ではタウブ・ハルビー（ハルブ族の貫頭型長衣という意味）、ブシュール村ではムドゥハーと呼ばれていた。

5.2 女性の衣服とライフイベント、ライフコース

ワーディ・ファーティマ地域における半世紀前の女性の衣服を、ライフイベント（人生における出来事）との関係からみると、結婚が最も大きな転換点であったといえる（郡司他 2019b）。つまり、ワーディ・ファーティマ地域の女性の伝統衣服は、結婚しているか否かで、はっきりと分けられていた。ただし、結婚以前は年齢段階ごとに衣服の変化もみられる。

以下、ダフ・ザイニー村、ブシュール村において、ライフイベントを含むライフコースに即した衣服の変化についてまとめる。

5.2.1 乳児期（0～約1才）

市場（スーク）の洋品店等で売っている、上半身から下半身までがつながったパンツスタイル、いわゆるカバーオールの子着、またはパンツと被り物のTシャツのような、欧米スタイルの衣服を着ていた。

また、女の赤ん坊を外に連れ出す際には、多くの場合、布でできた帽子で日差しから守っていた。なお、肌着は、おむつの代用であった布のみである。ブシュール村では、おむつのような布として、赤等女の子らしい色を使用したと聞いた。

乳児期の衣服は、どの村でもほぼ上記のとおりであり、地域差はみられなかった。

5.2.2 幼児期（2～約4才）

2～3才くらいから、クルタやフスターンというワンピース型（貫頭）の衣服を着た。乳児期の赤ん坊と同様に、洋品店等で売っている輸入品が多かった。ブシュール村、ダフ・ザイニー村の両方とも、短い丈の衣服であっても、クルタやフスターンと呼んでいた。この2つの衣服名称に関しては、丈の長さはあまり関係ないようである。スタイルとしては、シンプルなクルタであることもあるが、多くの場合、フリルやレース等がついたフスターンである。

また、外出時も、頭に被り物はしていない。肌着は下半身用のスルワール／シルワールのみである。

幼児期の衣服についても、同村でほぼ共通であった。

5.2.3 児童期（約5～約9才）

5才ごろになると、衣服は足首まで隠れ、足の見えない丈の貫頭型長衣であるクルタやフスターンを着るようになった。ブシュール村では5才くらいから頭覆いのスマーダを着けたが、ダフ・ザイニー村では10才くらいからだったという。

外着は両村とも着用する必要がなく、肌着は下半身用のスルワール／シルワールのみであった。

5.2.4 未婚期（約10才～結婚するまで）

個人差はあるものの、初潮が始まったころから内着として長袖のフスターンやクルタを着て手首まで隠すようになる。外着は着用する必要がない。なお、肌着は共通して、下半身用のスルワールのみであった。

外出時、ダフ・ザイニー村では、スマーダやタラハ（タルハ）／タルハの他、10才くらいからシャルシャフで髪の毛と共に、顔も巻き込んで隠し始めた。髪の毛を覆う布として、ブシュール村ではタルハとスマーダが共に多いのに対し、ダフ・ザイニー村ではシャルシャフが主流で、次にスマーダが人気であったという。

ブシュール村では10～15才くらいになると、黒いブルグア／ブルクアで顔を隠し始めたという。コイン等装飾のついたブルグア／ブルクアは既婚者用であった。この時期に頭も顔も布で覆うようになる。また、村によって、あるいは部族によってそれら外着や顔覆いの名称、デザインが異なり、差異が見られた。

本調査では言及されなかったが、片倉もこの記述によれば（片倉 1979: 83）、12～13歳頃になると少女は日常的に柔らかい布でできた長方形の頭・髪覆いタラハ（タルハ）／タルハを着けはじめた。未婚の時期のほうが、衣服に対して気をつける。髪の毛はかたく三つ編みにし、頭の上に巻きあげるとめ、その上にタラハ（タルハ）／タルハをかぶった。

5.2.5 既婚期（結婚後）

内着として、タウブ（トープ）／サウブと呼ばれる直線的な貫頭型長衣を着用するようになった。胸のあたりや袖口、裾回りに刺繍等の模様が施されている場合が多かった。妊娠しても同じ衣服を着ることができくらいゆったりとしている。動きやすいため人気があり、現在でも50才代以上の女性にはタウブ（トープ）／サウブを着用している人もいる。また、結婚後もフスターンやクルタが着用されることもあった。結婚してから初めて使用する衣服のアイテムとして、上半身用肌着スドリーヤ（シディーリーヤ／スダイリーヤ）があった。これはブラジャーの役割も担っていた。

さらに、内着にはバリエーションがあり、ダフ・ザイニー村の60才代と思われる未婚女性がフスターンを着用していた。夫と離婚または死別した女性は、内着にタウブ（ト

ープ) / サウブを着ていた。

タウブ (トープ) / サウブの上には外出時は両村で外着として、ムサッダフ等を着用し、さらに頭覆いおよび顔覆いを身に着けた。また室内においてもムサッダフのまま過ごす場合もあった。

以上が、ブシュール村、ダフ・ザイニー村におけるライフイベントを含むライフコースと衣服の関係である。さらに、その他地域における頭・髪を覆って顔を隠す衣服についてもバリエーションがあった。日常生活でハルブ族やアタイバ族の女性たちは、飾面ブルグア / ブルクアをかぶっていた。またヒジャーズ地域で広くマッカ、ジッダ、そしてワーディ・ファーティマ地域の一部でも、シュユーフ族、アシュラーフ族等の女性は薄い大きな布 (ムダウワラ) で髪を隠し、その上にシャルシャフ等を眼だけのぞかせてかぶっていた。

以上のように、半世紀前のワーディ・ファーティマ地域の女性は、結婚という大きなライフイベントによる衣服の変化はありながら、その衣服やかぶり物の柄や色、巻き方等には一人ひとりの個性をも読みとることができるといえる。

6 ワーディ・ファーティマ地域の女性衣服の再評価

現在サウディ・アラビア国内では、伝統的な民族的モチーフや刺繍技術を現代服に生かす試みが、デザイナーのあいだで広く行われている。西洋文化に親しんだ後、自らの伝統を文化遺産として再評価 (リバイバル) する動きが高まっているといえる。2002年から女性ボランティアグループ「マンソージャット」は不定期に民族衣装展覧会を開催し、忘れられかけている手工芸技術を復興させるため、刺繍工房で若い女性たち、特に障害のある女性の採用に力を入れている (サウジ・アラムコ 2005)。

本調査においても、ワーディ・ファーティマ地域の伝統衣服にみられるデザイン・装飾とGコレクションに共通する部分が見つかった。以下、デザイン・装飾を具体的に比較検討していく。

6.1 女性の衣服のデザイン・装飾の変化

6.1.1 刺繍

ワーディ・ファーティマ社会開発センターに所蔵されている伝統衣服の刺繍には、一般的なウェイブステッチ、チェーンステッチ等が見られる (Ross 1981; Topham et al. 1982)。ウェイブステッチで連続した三角形の模様を柄の一番外側に施すのが特徴的であるが、刺繍には実に様々なステッチが使われていた (図6)。特筆すべき刺繍・アップリケ装飾として、三角錐のように盛りあがった丸いベドウィン・ピナクル (スパイダーズ・ウェイブステッチ) と呼ばれる刺繍、赤い毛糸を縦横にくくりつけるコーチングス



図6 (a) 振袖用晴れ着の胸部に施されたベドウィン・ピナクル
 (b) 振袖用晴れ着の胸部に施されたベドウィン・ピナクルの拡大
 (c) アップリケとコーティングステッチ (出典: 郡司 2019a)

テッチ, 紺色と白の千鳥格子生地を使用したアップリケの3点が確認される。これらはすべてハルブ族の衣装の特徴といわれる (Topham et al. 1982; Ross 1998)。

次に示すものは, 特に多用されていたステッチである。

(1) ボタンホールステッチ

この刺繍では, 幅5mmから10mmほどの太い線を, 一方向に描いている。ブランケットステッチとも呼ばれる刺繍だが, 詰めてきっちりと刺すことによって面での表現ができ, 力強さが増す。

(2) ストレートステッチ

刺繍部分の末端, 無地の生地と接するところにおいて, 三角形の連続模様を表現するために使用される。この三角形という形状の持つ意味について, ワーディ・ファーティマ地域でサムドゥ村とダフ・ザイニー村において確認したが, 誰も知らないという答えであった。

一方, Al Tayibat City Museum for International Civilizationのエジプト人学芸員の説明によれば, 三角形のデザインは家で使用されたり, 女性の衣服等に使用されていることが多く, 家庭内での女性の地位が安定していることを示す場合がある, という。

(3) チェーンステッチ

鎖状につながった線を表現するステッチ。多くの場合, 柄と柄の境目等に, 直線の表現として使用されている。チェーンステッチを3本続け, 白, 赤, 白と交互に色を変えているケースが見られた。

(4) ベドウィン・ピナクルステッチ

はじめに3本の線を交差させて星形を差し, その後中央から外周に向かって円を描くようにきつめに刺繍していく。すると刺繍部分は徐々に高さを帯び始め, 最終的には円錐のようにとんがった形状となる。伝統衣服の胸部に4つから6つ配置され, ハルブ族の女性の衣服の代表的な特徴を有している。

(5) コーティングステッチ

太目の糸で柄をつくり, それを別の細い糸で生地にとめつけていく刺繍だが, これも

ハルブ族の伝統衣服に見られる顕著な特徴のひとつとされる。ハルブ族の伝統衣服では、ダルトーンの深い赤色の糸を使用し、ストライプやチェックを表現している。なお、現在の日本のアパレル業界では、同様のテクニックで刺した刺繍がコードステッチと呼ばれるときもある。

6.1.2 アップリケ

アップリケとは、土台となる生地の上に小さな別の生地を置き、ステッチで縫い付けたものである。古くは当て布として、傷みかけた部分や破れたところを補修する意味で始まった。

アップリケはハルブ族の衣装にみられる特徴のひとつと考えられている。特に、アップリケの生地としてインディゴ、またはインディゴブルーと白の小さな千鳥格子の生地を使用することが、アラビア半島に広く分布するハルブ族の衣服の共通点である（Ross 1981）。Al Tayibat City Museum for International Civilizationにおいても、ハルブ族の衣装とみられる衣服には、ほとんどこのインディゴブルーと白の小さな千鳥格子の生地を使用していた。このアップリケは衣服の裾や肩に使用されており、傷みやすい場所の補強としての意味合いもあったと考えられる。アップリケの上にさらにコーチングステッチを模様として、また補強として施している。

6.1.3 キルト

キルトとは、表布と裏布の間に布や綿をはさみ、細かいステッチで三重組織に仕立てたものである。古くは、十字軍が防護服としてキルティング生地で作った衣服を使用していた。小さな端切れを縫い合わせるにより頑丈さを増し、同時に模様としての演出もできる。その上、古くなった衣服等の小さな端切れを再利用することができるため、ものを大切に使うという精神にも即している（玉木 1992）。

ワーディ・ファーティマ社会開発センター所蔵の衣服 WFSDC_0115（遠藤他 2021: 表 6, 写真10）を調査した際、伝統衣服の裾にキルトが取り付けられており、キルト部分の裏地には、ピルズベリー社の商標や「AUGUST 1966」, 「A. H. R. / DAMMAM」, 「PATENT XXXX Flour」という文字が読み取れた。ピルズベリー社とは、アメリカ合衆国ミネソタ州ミネアポリスに本社を置く、穀物や食品取り扱いの世界最大大手企業のひとつである。小麦粉袋に使用された綿100%の平織の薄手生地は、キルトの裏地とするのに適しており、衣服に再利用されたと推測できる。この衣服についての記録は残されていないが、キルトの情報から1966年8月以降に製作されたものであることは確かといえる（図7）。



図7 ワーディ・ファーティマ社会開発センター所蔵の振袖型晴れ着の背面裏地（出典：郡司・藤本・渡邊 2019を一部改変）

6.2 デザイン・装飾のリバイバル

6.2.1 プリント柄

GコレクションにおけるG-C_004女児用フスターンは、本調査によって半世紀前にワーディ・ファーティマ地域で着用されていた衣服と同等品であると判明し、ビスコース混素材と思われる平織のカラフルな花柄生地が使用されていた。生地は後染めの4～5版プリントで、緩い織りである。地色はビビッドトーンの緑、ターコイズブルー、赤みの青、黄色、茶色、白があり、その色の中にバラの小花が飛んでいるプリント柄である。それら6種の生地をパッチワークして、このフスターンは作られていた（図8）。

さらに、この生地とほぼ同じ柄、同じ色合いの生地が2018～2019年の調査中、ジッターの旧市街にある市場で数多く見受けられた。また、この生地を用いて製作された衣服、

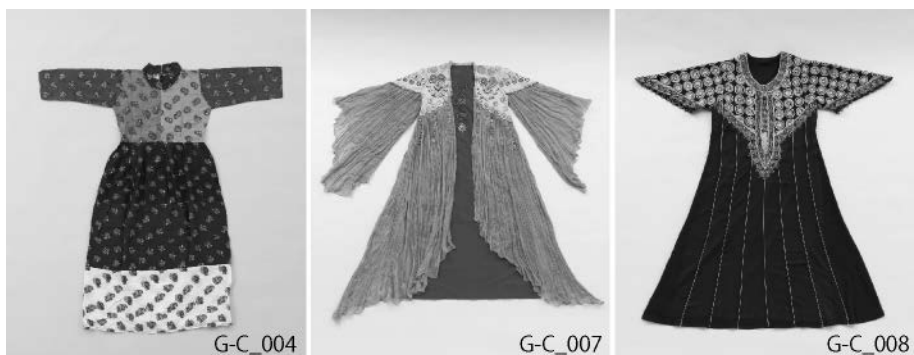


図8 伝統衣装のリバイバル（2019年2月藤原一徳撮影）

室内着、小物等が店先に出回っていた。ジッタ女子工業大学の学生が同じ生地を使用して、昔に流行した服をイメージして再現したというカラフルなパッチワークのフスターンを製作しており、同大学の服飾専門家によれば、近年花柄プリント生地は復刻版として非常に脚光を浴びているという。特に断食が行われるラマダーン月が近づくと、懐古趣味の高揚と共に人気が高まるということであった（郡司 2019b）。

6.2.2 デザインモチーフ

現代の衣服においても、コーチングステッチ、ベドウィン・ピナクル等の刺繍技術や、振袖状の長い袖がついた衣装の形状が、リバイバルされているものがある。

GコレクションのG-C_007やG-C_008は、サウディ・アラビアのデザイナーによる新しいコレクションであるが、「よみがえる伝統」がテーマとなっており、伝統的モチーフやイメージが現代的に加工されている。

G-C_007には、かつての伝統衣服のように三角形の袖が付いており、その肩回りには丸い形の渦巻刺繍が施され、ベドウィン・ピナクルステッチを思い出させる。刺繍そのものはベドウィン・ピナクルステッチではないが、イメージモチーフとして採用している。また、中央にはベドウィン・ジュエリーの一部を連想させるようなメタル製の装飾品がぶら下がり、胸元の左右にも、丸いビーズの飾りが下がっている。素材は現代的なものではあるが、かつての鉛ビーズや珊瑚ビーズを思い出させる。

G-C_008の胸元から肩、袖にもベドウィン・ピナクルステッチをイメージした丸い形の刺繍があり、袖口の端には小さなプラスチックビーズが縫い付けられている。中央に下がっているプラスチックビーズのタッセルは、おそらくかつての伝統衣装やブルグア／ブルクアに縫いとめられていた鉛ビーズや粒銀細工のイメージであろう。また、細いパイピングテープを使用して、伝統のコーチングステッチ風の演出をしていることも特徴である（図8）。

7 おわりに

本稿では、国立民族学博物館と片倉もとこ記念沙漠文化財団が所蔵する衣服コレクションならびにGコレクションにおいて、ワーディ・ファーティマ地域で半世紀前に着用されていたもの、もしくはその同等品とみなしうるものを特定した。そして、片倉もとこが半世紀前に撮影した写真をもとに現地の人々に聞き取りを行った結果、衣服とその名称のバリエーションと現在までの変化を示すことができた。とくに女性の衣服は、血縁・地縁の影響を受けながら、個人の人生と結びついて多様な変遷をたどっていることを明らかにした。

また、女性の伝統衣服において特徴的なデザイン・装飾に着目することで、表されて

いる民族的特徴や、再利用の精神と技術をすくいあげることができた。さらに、Gコレクションの現代衣服に用いられたデザイン・装飾と比較検討し、伝統的な民族的モチーフや刺繍技術が現代服に活用され、文化遺産として再評価（リバイバル）されている動きを確認できた。伝統衣服の多くは変化し失われてきた一方で、その特徴的部分は復刻し加工されて現在ものこり続けているといえる。

ただし、本調査において記録した衣服の名称や着用の実態について、さらなるバリエーションが存在することが予想され、今後も調査を重ねる必要がある。

具体的な課題としては、ワーディ・ファーティマ地域の衣服文化にみられる他地域の影響や交流をどう考えていくかという点がある。今回情報を得られなかった衣服写真について、人々は基本的に被写体の衣服が自分の村のものであるかどうか即答したが、南の地域のものではないか、と答えた写真が5枚あった。この「南」という表現には、注意が必要である。Rossが伝統衣服について調査した際、年配女性の貿易業者から、「南から」のものだと説明された衣服の多くが明らかにそうではなかった、と述懐している（Ross 1981: 9）。ただし一方で、人々の交流が盛んであった歴史から、ワーディ・ファーティマにおいて様々な地域の影響を受けた衣服文化が形成されたと推測されるため、衣服の名称や素材、デザイン等を対象として、具体的な事例を積み重ねて、考察を深めていきたい。

調査の成果のもととなった写真の被写体人物や撮影地の同定を進め、さらに被写体の親族関係・社会関係を明らかにしていくことで、衣服と人の関係についての新たな側面を浮き彫りにすることができる。背景に写った景観や家屋等、人物以外の被写体と衣服の関係についても今後、調査と分析を継続していきたい。

参考文献

〈日本語〉

遠藤仁・渡邊三津子・藤本悠子・古澤文・郡司みさお／アナス・ムハンマド・メレー／黒田賢治・西尾哲夫・縄田浩志

2021 「国立民族学博物館収蔵片倉もとこ収集資料とサウディ・アラビア, ワーディ・ファーティマ社会開発センター所蔵生活用具との比較研究」『片倉もとこフィールド調査資料の研究』西尾哲夫・縄田浩志編（国立民族学博物館調査報告153）pp. 87-138, 大阪：国立民族学博物館。

片倉もとこ

1974 「遊牧民集落の成立とその態容：サウジアラビア, ウサイダの事例」『東洋文化』54: 130-164。

1979 『アラビア・ノート——アラブの原像を求めて』東京：NHK出版。

郡司みさお

- 2019a 「刺繍とアップリケ——リバイバル」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.86-87, 東京：河出書房新社。
- 2019b 「生地と柄——リバイバル」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.88-89, 東京：河出書房新社。
- 2019c 「外着アバーヤの変遷」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.90-91, 東京：河出書房新社。
- 2019d 「現代によみがえる内着フスターン」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.92-93, 東京：河出書房新社。
- 2019e 「現代女性の装い」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.94-95, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・坂田隆

- 2019 「肌着——暑熱を逃がし、肌を守る工夫」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.80-81, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・藤本悠子

- 2019 「飾面の材料とつくり方」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.98-99, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・藤本悠子／アナス・ムハンマド・メレー

- 2019a 「女性の晴れ着と日常着」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.74-75, 東京：河出書房新社。
- 2019b 「未婚女性と既婚女性の衣服」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.76-77, 東京：河出書房新社。
- 2019c 「女性の外着、内着、肌着」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.78-79, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・藤本悠子／アナス・ムハンマド・メレー／縄田浩志

- 2019 「女性の衣服——半世紀前と現在」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.70-73, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・藤本悠子・遠藤仁／アナス・ムハンマド・メレー

- 2019 「飾面のデザインと飾り」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.96-97, 東京：河出書房新社。

郡司みさお・藤本悠子・渡邊三津子

- 2019 「縫製——リサイクル」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.84-85, 東京：河出書房新社。

サウジ・アラムコ

- 2005 『サウジアラビア——アラビア文化の諸相』 ザフラーン：サウジ・アラムコ。

坂田隆

- 2019 「暑熱と寒暖差への対応」 縄田浩志編『サウジアラビア、オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私』』 pp.50-51, 東京：河出書房新社。

玉木真紀

- 1992 「キルティングとパッチワークの文化」 共立女子大学所属アメリカン・アンティークキルトコレクション編集委員会編『共立女子大学所蔵 アメリカン・アンティークキルト

コレクション』 pp. 153-157, 東京：日本ヴォーグ社。

縄田浩志編

2019 『サウジアラビア, オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』
東京：河出書房新社。

縄田浩志／アナス・ムハンマド・メレー

2019 「男性の衣服」縄田浩志編『サウジアラビア, オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp. 68-69, 東京：河出書房新社。

縄田浩志・渡邊三津子／アナス・ムハンマド・メレー

2019 「オアシス, ワーディ・ファーティマの歴史」縄田浩志編『サウジアラビア, オアシスに生きる女性たちの50年——「みられる私」より「みる私」』 pp. 20-21, 東京：河出書房新社。

〈外国語〉

Awlad, 'A.

2016 Modesty, Gender, and Sexuality. In Abu-Lughod, L. (eds.) *Veiled Sentiments: Honor and Poetry in a Bedouin Society*, pp. 118-168. Berkeley, CA: University of California Press.

Binzagr, S.

1979 *Saudi Arabia: An Artist's View of the Past*. Lausanne: Three Continents Publishers.

1999 *A Three-Decade Jorney with Saudi Arabia*. Jiddah: Darat Safeya Binzagr.

Katakura, M.

1977 *Bedouin Village, A Study of a Saudi Arabian People in Transition*. Tokyo: University of Tokyo Press.

1996 *Ahal al-Wādī, Dār al-Qārī al-'Arabī*. (in Arabic)

Mols, L. and A. Vrolijk

2016 *Western Arabia in the Leiden Collection: Traces of a Colourful Past*. Leiden: Leiden University Press.

Topham, J.

1982 *Traditional Crafts of Saudi Arabia*. London: Stacey International.

Ross, H.

1994 *The Art of Bedouin Jewellery*. Clarens-Montreux: Arabesque Commercial SA.

1998 *The Art of Arabian Costume*. Clarens-Montreux: Arabesque Commercial SA.

参考ウェブサイト

Saudi Arabesque

2016 Traditional woman dress of Harb tribe, Saudi Arabia.

<http://saudiarabesque.com/traditional-woman-dress-of-harb-tribe-saudi-arabia/> (2020年10月15日最終閲覧)